

校長会報

平成30年度 第2号
発行所
島根県小学校長会
事務局
松江市母衣町 55
県教育会館内
TEL (0852) 27-8530
FAX (0852) 67-3360

いまどきの、リーダーシップ



島根県教育庁 教育監

高橋 泰 幸

新学習指導要領の先行実施がスタートして半年が過ぎようとしています。さまざまな新機軸が盛り込まれましたが、その目玉の一つが「社会に開かれた教育課程」。もともと、小学校というのとはより地域に最も身近な教育機関であって、そんなことはもうやっていますよ、と思われた校長先生も少なくないと思います。

ただ、ご承知のように今次改訂の求めるクオリティは、従来のいわゆる「連携」に比べいささかハードルが高い。学校、保護者、地域が指導要領の趣旨を理解・共有し、育てたい子どもの姿を議論し明らかにした上で、しつ

かり協働せよというレベルです。したがって、そのために校長には一層のリーダーシップが求められると。しかし、そもそもリーダーシップとは一体どういうものなのでしょう。

唐突ですが、ある経済誌に「上司にしたい歴史上の人物ランキング」というのが載っていました。

- 1位 織田 信長
 - 2位 坂本 龍馬
 - 3位 西郷 隆盛
 - 4位 山本五十六
 - 5位 徳川 家康
- 司馬遼太郎や山岡荘八の思い入れに

影響されていることは否認ませんが、それはさておき、このリーダーたちにはいくつかの共通点があります。たとえば、決断の速さ。先見性。包容力。時代の転換点でそうした力を存分に使い、彼らは鮮やかなリーダーシップを發揮しました。

加えて、この5人はいずれも不遇の人生を経験しています。弱小国の跡取り。長年にわたる流浪や人質生活。組織内での不当な冷遇。しかし、彼らはその境遇を嘆いたりしませんでした。

また、後年リーダーとして一定の組織を任されたときも、組織内の人材不足や資金不足をばやくこともありませんでした。なぜか常に明るく、前向き。リーダーシップとは、案外このようにシンプルなものかもしれません。

もちろん、明るく前向きなだけでリーダーは務まりません。緻密な戦略とそれを実行する勇気とがあって、はじめて組織はリーダーを信頼します。校長も、同じです。

戦略を立てるのは簡単なことではありません。ただ、その際に立つのが先行事例です。私が常々思うのは、そもそも教育論や教育方法に、オリジナリティなんてあり得ないということ。教育の歴史は数千年。孔子の時代から現在に至るまで様々な教育が試行さ

れ、その手法は循環しているように思えます。そのどこかに、自分の思いにフィットし、かつ自分の学校に有効な方法があるはず。それを「パクる」ことが肝要であると。

そして、実行にあたっては、歴史上のリーダーがそうであったように、無い物ねだり、無い物ばやきをしないこと。与えられた条件の中で最大限、最善を尽くす。そう腹をくくることが、前を向く姿勢を与えてくれます。

釈迦に説法。当たり前のことを長々と綴ってきたが、最後に蛇足を二つ、お許しください。

一つめ、高田純次。日本一のテキトー男と評される芸人ですが、意外や、若手にとっても慕われているとのこと。それはなぜか。彼は後輩に対して、決して「説教しない、自慢話しない、昔話しない」そうです。

二つめ、山本五十六。その語録の中から、お気に入りを入りを二つ。
「やってみせ、言ってみせて、やらせてみて、誉めてやらねば、人は動かじ。」

「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。」
いささか耳に痛いことばではありませんが、肝に銘じたものです。

松江支部

主体的で対話的で

深い学びを目指す

同時間接指導

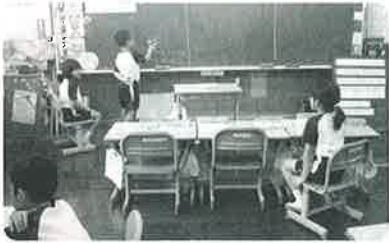
校長 高橋 隆子

(松江市立大谷小学校)

本校は、全校児童十三名の完全複式の学校である。

本校の複式指導の歴史は長く、算数のみ学年別でこない、その他の教科等はA、B年度方式で指導を行っている。二〇二一年の統合を控え、新学習指導要領全面実施の二〇二〇年にはすべての教科等で学年別指導をする必要がある。これを見越し、本年度から同時間接指導の研究を始め、教育センターの指導主事に継続的な訪問指導を受けることにした。

これまで算数は学年別指導を行っているが、直接指導のために「わたり」、指導者のいない時は、個別に問題を考える、適用題を行うという



指導形態が多かった。

そこで、主体的・対話的で深い学びを目指し

「ガイド学

習」を取り入れることとした。

基本は子どもたちが進め、指導者は「見守る」スタンスを目指している。「校長先生、算数は僕たちで勉強を進めているんですよ。」と話す姿に自信と意欲が感じられる。大まかなガイドをガイドにもフォロワーにも意識させ、みんなで学習を進める。自分の考えを図、言葉、式に表し、お互いの考えを聞き合い、話し合うことがようやくできるようになってきた。人数が少ないからこそ、お互いの考えをじっくり聞き合える。人数が少ないからこそ、一人でも多様な視点で考えるようになる。これからは、子どもたちが主体的に取り組めるようにするための導入のあり方、子どもたちの話し合いの深め方、子どもたちの言葉によるまとめ方に視点を置いて研究を進めていきたいと考えている。



シリーズ集 “複式教育の現状” ~わたり指導の実際~

シリーズ集

益田支部

主体的に他者と関わり、

学びを深めることのできる

子どもの育成

校長 樋野 淳巳

(益田市立桂平小学校)

本校は、今年度全校児童十九名の小規模校である。昨年度、県の複式教育推進指定校となり研究を進めた。「主体的・対話的で深い学び」を進めるのに、算数のわたり場面を切り口として取り組んだ。算数の間接指導の場面を子どもが主体的に動ける場面として捉え、その中で対話的な学習を進めることを考えた。

○指導の実際

指導に当たって、特に間接指導を意識して次のように取り組んだ。

①課題解決をするために、子ども同士の話し合う時間をしっかりとるように努めた。

②ノートやホワイトボードの書き方を指導し、自分の考えを文章化や図式化させた。また式の意味を考えさせた。特にホワイトボードに自分の考えを書いて友達に説明をする場面では、自分の考えを図や式に表して説明したり、逆に友達の話や図の意味を考えたりすること

で、学習の深まりにもつながった。また、担任もその学年につけなくてもホワイトボードを見ることで、各児童の考えを把握することができた。



③学習の進行を全校でパターン化し、授業の流れを子どもと共有した。学習の展開が分かっている中で、ガイドを中心にして子どもで学習を進めることができた。

④同時間接指導の場面を設定し、担任が二学年の学習状況を把握できるようにし、状況に合わせて指導できるようにした。

⑤まとめやふりかえりの場面で二学年が交流する場面を設定し、お互いが学んだことを聞き合うようにした。このような取組を行ったことで、間接指導の時間も子どもが関わり合いをもちながら学習を深めていく場面が多く見られるようになった。

今年度もこの学習スタイルを続けているとともに、他の教科でも子ども同士の主体的な関わりを大切にして



校紹介

サンライズふるさと学園として、

先人の教えに学ぶ学校として

小田川 徹 哉 (雲南市立寺領小学校)

小高い丘の上の校舎。毎朝、職員

室、校長室には子どもたちの元気な
あいさつの声が響いてきます。全校児
童五十七名の寺領小学校。子どもたち
は素直で明るく、下学年を優しくお世
話する姿も多く見ることが出来ます。

寺領小学校は、明治七年に日登村寺
領小学校として創立されました。「日
登」という地名は、日本地図地名索引
によると「日が早く昇る日向の集落」
とされていて、日本でもただ一つの地
名であると考えられています。英語に
変換すれば「サンライズ」です。これ
が「サンライズふるさと学園」のいわ
れです。

寺領小学校の教育は、ある先人の教
育実践に大きな影響を受けています。
その先人は、昭和二十二年地元で創立
された日登中学校初代校長の加藤歎一
郎先生です。先生は、戦後の復興途上
にあった当時、経済基盤の確立と民主
的な村づくりを目指した教育を展開さ
れました。中でも、学校教育に農業生
産活動を取り入れた「産業教育」や、
中学生の心情を綴った作文集「ひのぼ
りの子」の発刊などの綴り方の実践は

全国的な注目を浴びました。

現在日登中学校は、統合されており
ませんが、先生の教えは現在の寺領小
学校にも脈々と引き継がれています。
産業教育は、食と農の体験学習とし
て教育課程に位置付け、望ましい職業
観、勤労観の育成や地域への誇りと感
謝の心の育成につなげています。

また、綴り方教育は、児童の思いを
素直に綴った作文集「むろやま」とし
て五十五年間発刊し続けています。

そして今、寺領小学校は、隣接する
寺領幼稚園と連携して、先人の教えに
学び、地域に根ざした教育活動を展開
し、「サンライズふるさと学園」として、
ふるさと日登で生まれ、育ち、巣立つ
ていく子どもたちを育成しています。

教育とは、つめこむのか、作るの
か、育てるのか、
否、育つのだ。育つ
ものは、待たねばな
らぬ。先生あなたは
待てますか。ほん
とに待つということ
を知っていますか。

加藤歎一郎



校紹介

地域と共に町の課題を考える

『山と生きる』をテーマに全校で取り組む学習

樋野 不二子 (邑南町立日貫小学校)

豊かな自然と、蔵が並ぶ街並みの中
に建つ本校は、明治七年開校の歴史あ
る学校で、全校児童十三名の学校であ
る。小規模校の魅力を生かす取組とし
て地域での体験活動などを積極的に取
り入れている。その際、活動ありきで
はなく、児童にどんな力を付けるかが
大切であると考えた。まず、学校教育
目標をもとに「付けたい力」を考え、
それを活動のねらいに位置づけること
とした。そして、児童と共に、総合的
な学習のテーマを中心にした主な計画
を立て、各教科・領域とのつながりを
表したカリキュラム一覧を作成して計
画的に学習を進めている。

で、竹や特産物であるごぼうの活用、
自然環境を生かす等、学習を通して考
えたことを伝える会、「町づくりワー
クショップ」を開いた。保護者や地域
の方からも発表していただき、一緒に
町づくりについて語り合った。

地域の方に支持されていることに自
信を持ち、今年度は、「日貫子ども議会」
を開き、「町づくり」への提言を行った。
多くの方の参加があり、学校の取組に
地域の方が関心を寄せておられること
を感じた。この議会での提言の実現に
も、多くの方の協力を得ている。十月
には、「日貫一周ノルディックウォー
キング」を行い、日貫の良さを再発見
し、ごぼうを使った郷土料理を食べ、
竹のやぐら作り等を行う予定である。
児童が考え、中心になって行う活動
に大人が本気で協力
することが、自信に
つながり、主体的で
能動的な学びをする
児童の育成につな
がっている。これか
らも地域と共にある
学校教育を進めてい
きたい。

中心となるテーマは、児童が地域に
ついて学ぶ内に、山の状態が悪くなる
と災害が起きやすくなることを知った
ことからできた「安心安全な町づくり
『山と生きる』」である。取組の一つが
竹林整備であり、竹の活用法としての
セルロースナノファイバーがあること
を知った。その研究をされている大学
の先生との学習会で、保護者や地域の
方と共に考えを出し合ったことがきつ
かけで、町の課題を学校と地域で共に
考えようという気運が高まった。そし



事務局だより

事務局長 奥村 忠孝

(松江市立内中原小学校)

中国地区小学校長会 第一回理事会
並びに連絡協議会等について(報告)

七月二十七日(金)、今年度は松江市において開催され、鳥根県からは金山会長はじめ十三名が参加しました。主な点について報告します。

一 第六十五回中国地区小学校長会
教育研究大会鳥根大会について
平成三十年十一月九日開催

(一)流れ等について

- ・ 一日開催とし、理事会・理事懇親会は前日に開催する。
- (二)二次案内記載事項の変更確認

- ・ 全体会場の最後尾に分科会関係者の席を設定する。
- ・ 分科会⑥の会場を展示室に変更する。
- ・ 分科会打合せ会場と時刻を変更する。

前記の内容について、大会実行委員会松浦事務局長に説明していただき、了解を得ました。

二 第六十六回中国地区小学校長会

教育研究大会鳥取大会について

平成三十一年十一月八日開催

(一)提案事項

- ・ 宿泊については、旅行業者委託を検討している。
- ・ 駐車場確保が困難であるため公共交通機関の利用をお願いする。
- ・ 次回理事会において各県割当分科会提案者・司会者の報告について知らせる。

三 第六十七回中国地区小学校長会

教育研究大会山口大会について

平成三十二年十一月十三日開催

(一)提案事項

- ・ 鳥根県へは、分科会提案割当てして「⑤豊かな人間性」と「⑨学校安全」をお願いする。しかし全連小のテーマとの関わりで変更の可能性もある。

四 情報交換

- (一)「働き方改革」における各県の状況並びに学校業務改善について
- (二)外国語科新設に伴う移行措置の実施に向けた課題とその対応状況について

五 今後の中国地区小学校長会

教育研究大会に関する確認事項

(一)平成三十四年度鳥根大会は全国大会となる。(中国大会を兼ねる)

※全国大会は、二千人を越す規模の大きな研究大会になります。数年前から準備を始めることになりま

すのでご協力をよろしくお願います。

(二)平成三十六年度は山口大会、三十七年度は岡山大会とする。(年度の入れ替えをする)

六 その他

会の冒頭、広島・岡山両県小学校長会に対して、山口・鳥取・鳥根の各県小学校長会から、豪雨災害への見舞金贈呈があり、広島・岡山両県小学校長会から感謝の気持ちが述べられました。

県教育委員会との意見交換会(報告)

八月二十一日～二十二日、第三回理事会を開催しました。一日目の午後は県教委との意見交換会を行い、(一)「教員を取り巻く現状について(長時間勤務・メンタルヘルス・働き方改革)」、(二)「新教育課程への取組について」の二つの話題で県教委の皆さんと意見交換をしました。

(一)については、石橋義正常任理事(大田・長久小)から、長時間勤務・メンタルヘルス・働き方改革それぞれについて、長久小の現状と課題解決に

向けての手立てが整理されて、紹介されました。各理事からは、各校での具体的手立てや、各市町村での実態が報告されました。

(二)については、安部清志常任理事(安来・安田小)から、県教委が作成したリーフレットに沿って、「社会に開かれた教育課程」としてのふるさと教育や図書館活用教育を柱とした「主体的・対話的で深い学びのある授業」への取組などの事例を情報提供していただきました。各理事からも、移行期間での各校の現状や今後の見通しについて活発に情報提供がありました。

県教委からも、その都度情報提供や施策についての説明、具体的な取組についての感想をいただく中で、各理事からの思いのこもった話題も次々と提供されていき、とても価値ある時間となりました。

編集後記

会報第2号の発行にあたり、ご多用のなかご執筆いただきました皆様にご心よりお礼申し上げます。また、小学校時報8月号では今月のことばで鳥根県立短大名誉教授小泉凡氏にご執筆いただきました。ご寄稿に携われた皆様にもお礼申し上げます。(鳥山)